GNH研究所 ニュースレター 創刊号

2012年4月1日

スピーチされる国王陛下
2011年11月のブータン国王・王妃両陛下歓迎レセプションにて
出典：日本ブータン友好協会発行「ブータン国王・王妃歓迎レセプションアルバム」

ニュースレター発行に寄せて

GNH研究所 代表幹事 平山修一

先の11月に5代目ブータン国王が訪日されたことは日本人の多くの方々の記憶に新しいと思います。お后を伴われ被災地を始めとした多くの場所を自然体でご訪問された国王の振る舞いや言動は多くの日本人に【爽やかで温かい風】を吹き込んで下さったように思えます。

「このような不幸からより強く、より大きく立ち上がれる国があるとすれば、それは日本と日本国民であります。私はそう確信しています。皆様が生活を再建し復興に向け歩まれるなかで、我々ブータン人は皆様とともにあります」

私たち日本人は本来このように他者を受け入れ、他者を尊重し、他者を思いやる精神を持っていたのではないでしょうか。改めてブータン国王の言動から自らの社会や自身の生活を見直す時期に来ているのかもしれません。また、今回の災害に対して多くの国から受けた温情を忘れてはいけないと思います。

GNH研究所はブータン発の思想【GNH：国民総幸福度】の考え方、フレームワークを如何に日本社会や私たちの生活に応用するかとのスタンスで活動をしております。決してブータン賛美の人間の集まりではありません。どこの国も多くの矛盾と悪い面は持っていて当然でしょう。その上でその良い面から何かを学ぼうと努力しております。

当研究所では設立6周年を迎え、このたび新たにニュースレターを不定期で発刊することになりました。このニュースレターの目的は、

1. GNHをより分かりやすい形で会員に伝える
2. 会員間の交流の場とする
3. GNH研究所としての歩みのアーカイブとする

の3点が挙げられます。

会員の皆様も自分のできる範囲での関わり方で結構です。GNH研究所の活動を盛り上げていただければと思います。それでは本文を持って発刊の挨拶とさせて頂きます。

コラム① 大洪水の中で思う「足るを知る」

By 小田哲郎

タイに暮らしている者としては、今回の洪水について触れざるをえない。このニュースレターがお手元に届くころにはバンコクの洪水騒ぎも収まっているだろうが、執筆の依頼を受けた時点では家族を連れてバンコクからタイ東北地方の街へと避難していた。タイの農村開発に係わり始めて約10年になるが、毎年のようにどこかで洪水か干ばつの被害は発生している。特に多雨の年は川に近い一部地域で湛水被害があるものの、地域全体では場合は雨が十分降ったのでコメは豊作となる。洪水地区ですら田んぼにとっては養分の豊富な土壌が流れ込むため土が肥える、自然の魚が捕れるなど悪いことばかりではない。一方、干ばつは広い地域に農作物被害をもたらし、工業地区でも水が足りないと大騒ぎになる。

しかし、今回はいつもと違った。バンコクで洪水(ナム・トゥアム) と言えばスコールの後に道路が冠水してしばらく水が残ることであり、水量が増した川や運河が溢れることだった。今回は大量の水の塊が、北部から水路や川を伝ってではなく、平地をテーブルにコップの水をこぼしたかのように広がってアユタヤの工業団地を飲み込み、さらに南下してバンコクにまで迫まった。政府・軍は工業団地を死守すると言ったが翌日には堤防が決壊し、世界の自動車・電子機器産業を混乱に陥れた。バンコク都知事は首都を洪水に入れないと言いつつも政府対策本部を置くドンムアン空港も水没し、その映像は深刻さを世界に伝えた。

バンコク中心地を守るためにバンコク北部、東部、西部は水没し、2ヶ月近くもそれが続いた。守られたバンコクの中心地にいる者として心を痛めると共に、何を守るべきかの優先順位は経済的価値だけで決めるべきなのか、犠牲にされる地域の人々との痛み分けはできないか等を考える日々が続いた。日本政府の支援も復興段階に入り、日系企業が操業を再開できるように工業団地を中心に行われている。それはタイ経済にとっては非常に重要で多くの雇用を守るためにも大切なのだが、より広範囲に被害を受けた農村地域や農業についてはどうなのか？いつもの洪水とは比べものにならない大きな洪水被害から、どう農村が立ち直っていくのだろうか。世界一のコメ輸出国の穀倉地帯の被害が世界の食糧に与える影響や、高齢化・後継者不足が現実として起こっている農村部の将来についても心配になる。

タイのプミポン国王は「足るを知る経済」思想を提唱しているが、その柱の一つとして「自己免疫」という外部からのショックを緩和し回復するキャパシティが重要とされる。そこには、経済的発展を追い求めバブルがはじけたアジア通貨危機の反省がある。コントロールできない世界経済や天候異変のリスクが常にある現代社会の中でのリスクマネジメントとセーフティーネットの智恵といえよう。

日本の震災・津波の際にみせてくれた他人を思いやるタイの人々の心の優しさ。この洪水の最中でも、新たなボランティア精神の高揚が垣間見られた。洪水の危機にあっても笑顔を忘れず、その状況に対処していくアイデアが人々の中からも生まれている。「自己免疫力」・「災害につよい社会」はこのような人々の中に見いだせるのではないだろうか。今年から始まる第11次経済社会開発5ヶ年計画では「グリーンで幸福な社会」を目指すタイ政府。洪水後のタイ社会がどのようなビジョンを描き、「足るを知る経済」を踏まえつつ復興の道筋を描いていくのかを見守っていきたい。

ブータン・パロ谷の風景

小田 哲郎（おだ てつろう）
GNH研究所 会員

JICA農村開発専門家として、タイ東北地方で「足るを知る経済」に基づいた農業・農村開発事業に2003年より従事。消費者に安全な野菜を届けつつ有機農家を支援する活動で、洪水被災農家を支援中。

コラム② ブータン赴任当時を思い出して

By 瀬畑陽介

自分自身の国際協力のスタート地点であるブータンでの青年海外協力隊員（以下、協力隊員）当時を思い出してみた。初の途上国がブータンであった。恐らく全ての協力隊員派遣国では、新任の協力隊員向けに“現地訓練”というのを行っていると思う。ブータンでは、「1．政府主催オリエンテーション」「2．現地語訓練＆ホームステイ」であった。

ブータンへ派遣される協力隊員は一度に4〜5人がいい所。しかし、私の同期は7人居て、通常お願いしているホームステイ先だけでは足らなかった為、普段お願いしていないお宅へもお願いする事となった。そしてその日、くじ引きで行き先を決めてお世話になるお宅へと向かって歩いた。同期の中で、一番遠くの家までトコトコと。集落を外れてたどり着いた家は、お世辞にも裕福とは言えない家だった。4畳程の部屋が3つ連なった小さな家だった。

外国から来たお客さんを精一杯もてなそうとするホストファミリー。私は客間へと通された。ブータンでは一般的に「客間＝仏間」で、家の中で一番大切な部屋である。その部屋へ通されはしたものの、そういった事を知ったのは後の事。晩ご飯、その客間で一人運ばれて来た晩ご飯に手をつけた。お世辞にも立派な晩ご飯ではなかったが“お客さん扱い”は嫌だったので翌朝からは一緒にご飯を食べさせてもらうべくお願いをした。

翌朝、私を待っていたのは大きな衝撃であった。昨晩、私が食べた晩ご飯はおかずが二品、それに目玉焼きと飲み物。それはお客さん向けのご馳走であった。他の家族が食べていたのは、ご飯とおかずが一品。それを4畳にも満たないであろう寝室兼リビングで家族5人が寄り添って食べていたのである。それまで知識として“途上国の貧しい家庭”というのは見ていたが、目の当たりにして大きな衝撃が襲って来た。「こんなにも貧しい家庭があるんだ」と。

しかし、このホームステイ先に“貧しい”という悲壮感は無く、心は大変豊かであったと後になって思う。子供達の笑顔は絶えず、両親の表情も豊かであった。残念ながらホームステイ中はカルチャーショックの大きさに負けて、それらを感じる余裕すらなかった。

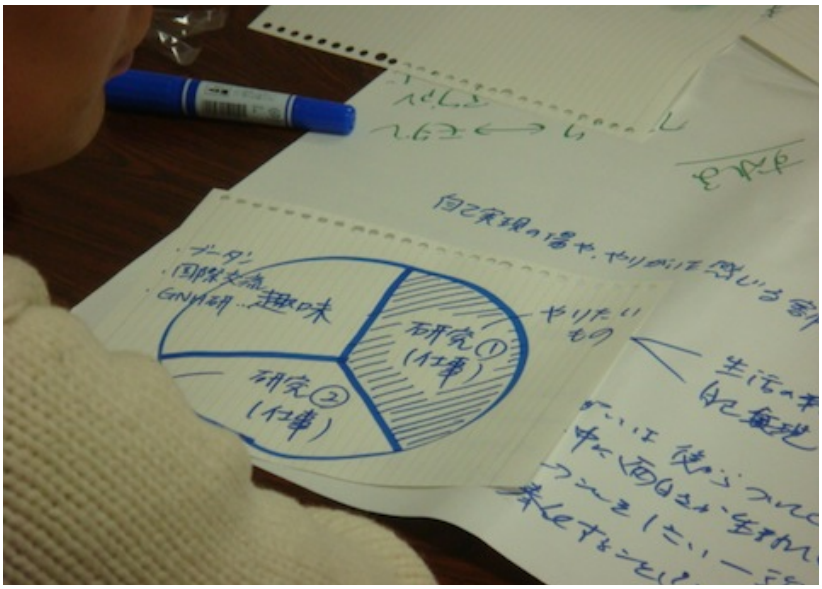
「途上国の人達は、先進国の生活を知らないから、ああして笑顔で居られるんだよ」と言った声を聞いた事もある。しかし、このホームステイ先はブータンからタイのバンコクへと飛び立つ飛行機を毎日目の当たりにし、そして眼下には自分たちの家族達よりも遥かに立派な家、遥かに裕福な家庭が広がっている。しかし、それでも“自分たちは貧しい”という悲壮感は全く感じなかった。

国レベルでもブータンは裕福な国とは言えない。ブータンが日本に対して行った義援金の金額を円換算したとき、他国のそれに比べると決して多くはないと思う。しかし、ブータンという国の経済力を考えたとき、義援金を行う決断は大変なものであると思う。更には義援金を決断した早さや、震災発生翌日には国王が自ら法要を行い、早急にブータンの在留邦人に声を掛けて、哀悼の意を表して下さった。こうした気持ちはブータンひいきの日本人でなくとも嬉しいと思う。

GNHという基本政策を掲げたブータン王国の政府、そしてブータン人から我々が学ぶべきモノは多いと思う。何が彼らの表情を豊かにしているのか？何が心の優しさを形成しているのか？ブータン王国発の思想【GNH】の研究を続けて、豊かな表情で、豊かな心を持ち続けて過ごせる様な社会作りに役立てたいと思う。

瀬畑 陽介（せはた ようすけ）
GNH研究所 研究員
元ブータン派遣JOCV、元国連ボランティア。現在、笹川アフリカ協会IT Managerとしてエチオピアのアディスアベバにて業務についている。

ホームステイ先の親子



東京定例会合の様子。各人、「自己実現の場ややりがいを感じる役割」について円グラフを描き、グループで共有した。

東京定例会合報告 2012年3月18日開催

文責 須藤伸（GNH研究所 東京事務局）

●会合概要

・開催期日　2012年3月18日（土）
　10:00〜13:00
・場所　JICA 地球ひろば（東京・広尾）

●内容

本会合では、代表幹事である平山修一が「働くことを考えてみた」というテーマでプレゼンテーションを行い、続いて、同テーマに関する対話をワールドカフェ形式（注1）にて実施、最後に報告・連絡事項を共有した。

プレゼンテーションでは、ブータン・タイ・日本間での労働観の比較を通じ、現代社会の働き方への疑問が投げかけられた。その後の質疑応答の中では、「日本では憲法で勤労の義務が定められているが、そのような義務はタイにもあるのか」という問いに対し、「日本のように明文化されたものは聞いたことがない。ただし、タイでは子供を育てることを重視する親が多く、それが義務や責任のようなものかもしれない」という回答があった。また、「どんなにお金や名声を得ても、死ぬときに持っていくことはできない。ある程度の年齢に達したら、魂を磨くことに時間を費やす生き方もあるのではないか」、あるいは、「これまでは両者にとってウィンウィンの関係が大事にされてきたにもかかわらず、利己的な主義が普及するにつれてそれが崩れていていったのではないか」といった意見が寄せられた。

ワールドカフェでは、「あなたにとって、働くことの意味はなんですか」、「やりがいや働きがいを感じるのはどんな時ですか」、「あなた自身の生活を振り返り、自己実現の場ややりがいを感じる役割を円グラフで表してください」という3つの問いについて3〜4名ずつのグループに分かれて活発な議論が交わされた。特に、3つ目の問いについては各人が描く円グラフに大きな違いが見られた。「やりがいを感じる趣味と仕事を結びつけるにはどうしたらよいかを模索中」であるとか、「仕事は与えられたことをやることに意義がある。与えられたことをどのように自分の中で処理し、こなしていくかの転換作業が必要」といった議論を交わしながら、それぞれの描いた円グラフを共有した。

ワールドカフェ後の感想としては、「他の人たちのグラフを見て、やはり仕事よりも趣味や自分の時間に生きがいややりがいを感じている人が多いんだな、という印象を受けた」、「できることなら、円グラフの真ん中に自分の指針や共通するテーマを書き込むことができればさらにいいグラフになるのではないかと感じた」という建設的な声が聞かれた。

次回定例会合は6月〜7月頃に開催予定（通常、東京定例会合は四半期に一度開催）。

注1：カフェのようにリラックスした雰囲気の中で、設定したテーマについて対話を行う手法。

掲示板

● 5月13日 (日)、「第2回日本ブータン研究会」開催予定。ブータンをフィールドに研究を行う若手研究者や大学院生が日頃の研究成果を披露し、意見交換を行う。お問合せは、日本ブータン研究会事務局 bhutanstudies@gmail.com まで。

● 書籍「GNH（国民総幸福） みんなでつくる幸せ社会へ」（枝廣淳子・草郷孝好・平山修一著）、および、「ダワの巡礼 ―ブータンのある野良犬の物語―」（平山修一・森本規子監訳、会員有志による翻訳）が現在発売中。

編集後記

● 拙宅の灯油ストーブを囲み「GNHの研究グループを作ろう」とブータン在住の日本人有志数名で語りあったのは2005年の新年を迎えた頃でした。今でこそ知名度の高くなったGNHですが、当時は知る人ぞ知るの神秘の国の話題。数少ないメンバーが役回りで各々のGNH体験をホームページのコラムに紹介する事から活動を始めました。その後GNHは国際的に注目されるようになり、この数年で、GNHを取り巻く環境は随分変わりました。そこでGNHに関心を持つ方々と、よりタイムリーな情報の共有を推進すべく取り組んできたのがニュースレターの発刊です。今後も私達が進むべき社会のあり方に対し、ある方向を示す事ができるようなニュースレター作りに取り組んで参ろうと思います。（高田忠典）

● 高田さんより、ニュースレター編集の依頼を受けたのが、2月初頭のこと。「デザインは素人ですよ」と軽口を叩きながら安請け合いしてしまいましたが、時が経つにつれて、事の重大さを受け止めるようになりました。走り出してからが肝心なのは重々承知の上ではありますが、まずは、GNH研究所の新たなステップに立ち会うことができた幸運に感謝します。（藤原整）

RIMの入口に立つハダルの立て替え。当然の様に手の空いている者が手伝い、みんなで協力し合いながら作業が進行して行く。

GNH研究所 ニュースレター 創刊号

発行元　GNH研究所（代表幹事：平山修一）
http://www.gnh-study.com/
発行日　2012年4月1日
編集者　高田忠典（GNH研究所 研究員）、藤原整（GNH研究所 研究員）
著者　平山修一（p.1）、小田哲郎（p.2）、瀬畑陽介（p.3）、須藤伸（p.4）
写真　白井一（p.1）、瀬畑陽介（p.2,3,5）、須藤伸（p.4）
※全ての著作物および写真の著作権は、上記の方々に帰属しています。